

ネットワークアンケート ⑤2

糖尿病ネットワークを通して

医療スタッフに聞きました

Q. 高齢患者さんへのSMBG指導は、非高齢の患者さんに比べて難しいと感じますか？

糖尿病患者さんの半数以上は高齢者で、その割合はさらに増加中。加齢に伴う身体機能の低下や合併症の影響で、血糖自己測定を行いにくいと感じになる患者さんもいらっしゃるようです。そこで今回は、患者さんが、ふだんのSMBG操作にどんな困難がおありなのか、またはないのかをお尋ねしました。

[回答数：医療スタッフ123(医師18、薬剤師10、看護師69、栄養士11、その他15。うち糖尿病療養指導士38、糖尿病認定看護師18)、患者さん345(1型143、2型193、その他9。経口薬療法45%、インスリン療法74%、GLP-1受容体作動薬療法4%)。重複あり]

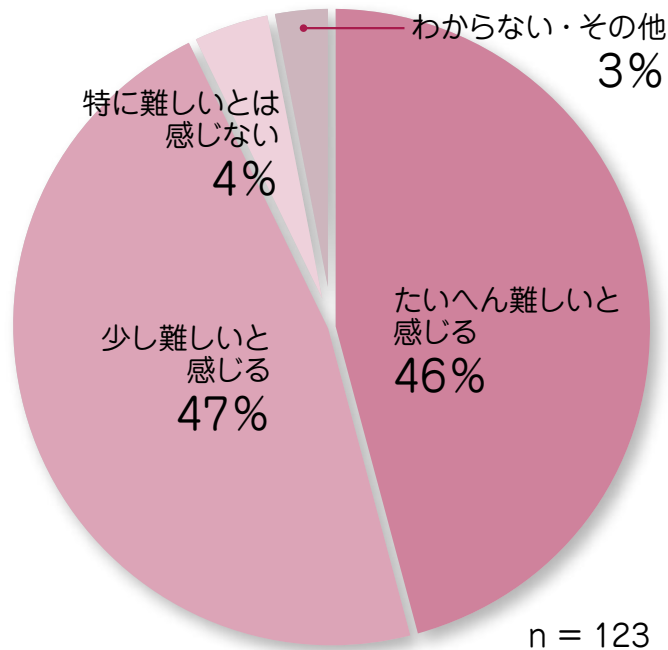
「たいへん難しいと感じる」と「少し難しいと感じる」がほぼ同数で、合わせると9割以上に上り、高齢患者さんへのSMBG指導に関わるハードルの存在を垣間見ることができます。

「難しい」と感じる理由を具体的に挙げていただくと(複数選択可)、「穿刺針やセンサーの装着など、細かい作業に支障がある患者さんが多い」(82%)、「測定操作をなかなか覚えられなかったり、忘れてしまう患者さんが多い」(74%)、「エラーが表示された時の対処方法がわからない患者さんが多い」(58%)、「液晶画面の情報量が多過ぎて、理解しきれていない患者さんが多い」(32%)などが挙げられました。

Q. 操作が煩雑でも機能が充実している測定器と、機能は少なくても操作が簡単な測定器があるとしたら、高齢患者さんにはどちらを用いますか？

この質問に関しては、測定操作の簡便さを優先する声が大多数を占めました(右ページ右下の帯グラフの上段)。

今回のアンケートでは総じて高齢者のSMBGの難しさが浮き彫りになりましたが、「医療者側が患者さんのスキルを低



く見積もりすぎ。クラウド連携でデータを送ってくれる70歳の人もいます。65歳など全然問題ない(60歳代、医師)や、「個人差が大きく年齢で分けることは適切でない(50代、臨床検査技師)との声もありました。その他の自由回答をピックアップし紹介します。

自由記述から

老老介護でSMBGが困難であるケースが増えてきていると実感。できていたことができなくなったときご本人を落胆させないよう、継続できる関わりが大切。そのためには在宅でのサポートが必要と感じる(40代、看護師)／70～80歳代の患者にインスリン導入およびSMBG指導をすることがあるが、インスリンと混同してしまいうまいかないケースが多々ある(50代、糖尿病認定看護師)／SMBGへの対応の柔軟さで、かえって患者の認知機能が明らかとなることもある(50代、医師)／若い方に比べて数値にとらわれ過ぎ、結果を気にし過ぎて不安を訴える方が多い(50代、管理栄養士)／できるならSMBGを継続したいが、手の震え、採血困難、視力低下、理解力の低下、家族の協力の有無で困難になる方も多く、HbA1cでのコントロール把握になることも多くなる現状(50代、薬剤師)／患者さんの認知能力(操作が覚えられるか)、手技力(手指の巧緻性)、視力(糖尿病網膜症の進行状況、血糖値が見えるか)などをアセスメントして、測定機種や指導方法を検討し、指導を開始している(40代、糖尿病認定看護師・CDE)

Q. 患者さんの加齢に伴い、SMBG継続が次第に難しくなるケースはありますか？

そのようなケースは「ほとんどない」との回答は10%未満にとどまり、患者さんの加齢に伴いSMBG継続に何かしらの困難が生じたという経験をおもちの方が多くようです。

こういった場合も含めて、高齢のためにSMBGが困難なケースへの対応としては、「ご家族に測定してもらおう」が55%で過半を占め、2位以下は「血糖管理にやや目をつむりSMBGを処方しない」(22%)、「訪問診療の際に医療スタッフが測定する」(11%)と続きました。

